

40年前の私

昨日レポートした関西学院大学の原田哲史教授が「40年ぶりにお会いした」といわれ、なんだか当時を思い起こす。大阪市立大で大学院オーバードクター1年の頃、どこかに就職しようと必死であった。運よく1979年4月、名古屋市立女子短大(市短)に就職が決まった。写真は市短のキャンパス。こじんまりとしたキャンパスであり、4階の研究室に朝早くから毎日通った。広めの研究室だったが、すぐに本や資料で一杯に。



卒業式に市短正門で学生と撮った写真を見ると、まだ若かった。就職した頃は、女子短大生を前にキンチョーして講義をした。自由な雰囲気の中で、学生とよく語り合ったものだ。学生食堂2階で大学祭の恒例イベント「徹夜討論」が行われ、よろこんで参加した。



つい市短時代の思い出となったが、いまから40年前の1981年に話をもどそう。就職した1979年当時、名古屋はオリンピック招致をめぐる揺れていた。名古屋市千種区の「平和公園」南部をメイン会場として、1988年オリンピック招致に政財界が動いていた。自宅が東山公園近くの古いアパートだったので、平和公園南部は散歩のコースであり、地元の問題としても五輪騒動に関心があった。

写真は1981年10月に風媒社から刊行された『反オリンピック宣言 その神話と犯罪性をつく』。名古屋大学経済学部教授の水田洋先生が、まえがきを書いている。「この本の特徴は、体育の理論と実践にたずさわるスポーツ専門家が、オリンピックに反対する理由をあきらかにしたということにある。



スポーツの社会的なありかたへの反省は、これまでになかったわけではないが、そういうばあいにも、オリンピックそのものは、聖域として犯されることがなかった。この本は、その境界をふみこえて、オリンピックの本質にせまろうとしているのである。」

この本はスポーツ関係者による初の五輪批判である。水田先生は「社会思想史の研究者として、責任感のようなものを感じた」として、本書の編者の一人となり、五輪批判の先頭に立たれた。じつは、私も本書に「オリンピックをめぐる名古屋市の財政・都市問題」というテーマで執筆している。地方財政の研究者の一人として、黙ってはおれなかった。市短に就職したばかりの頃で、なんだか風当たりも強かった。

1981年9月30日、西ドイツのバーデンバーデンで開かれたIOC総会で、1988年の五輪はソウルに決まった。名古屋五輪は幻となったが、その後の私の研究に少なからぬ影響をあたえた。2005年の愛知万博、先の東京五輪・パラリンピック、そして2025年に予定されている大阪・関西万博などへと続く。いまいちど40年前に感謝したい。

(2021年10月28日)